

## シリーズ 明治 150 年②

# 磐田に残る 明治の記憶



今年、明治元年（1868年）から起算して満150年。  
明治以降、日本はさまざまな分野で近代化への取り組みを進め、  
近代国家としての礎を築きました。  
この近代化の波は、やがて私たちの住む地域にもやってきます。  
このシリーズでは、明治期の磐田市の様子をご紹介します。  
シリーズ第2回目は、天竜川の「橋」と「掛塚灯台」、福田の「織物」です。

**磐**田市と浜松市の間を流れる天竜川は、たびたび洪水を繰り返し、古くから「暴れ天竜」と呼ばれていました。江戸時代まで天竜川には橋がなく、天竜川を渡るには渡船が使われていました。市内には、池田や掛塚などに渡船場があり、当時の人々は船を使って川を渡っていました。

明治7年（1874年）になると、現在の天竜川橋付近に初めての橋が架けられました。当時の橋は木製で、相次ぐ水害での修繕が必要であったため、維持費として通行料を徴収していました。明治15年（1882年）には、池田地区にも木製の橋が架けられ、昭和初期まで利用されたばかり木製で掛塚橋が架けられました。



### 「暴れ天竜」を越える 渡船から橋へ

茨城県立歴史館所蔵



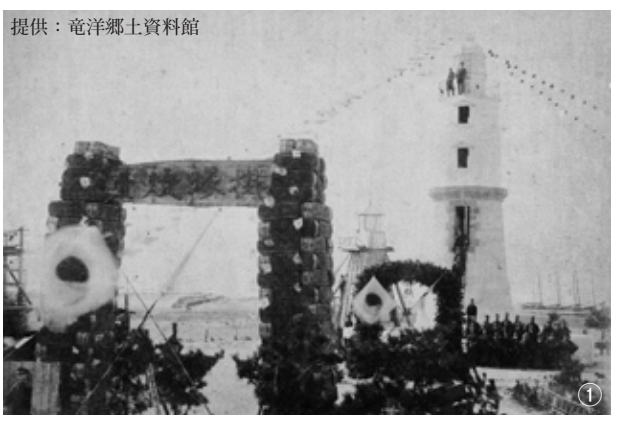
▲◀明治中頃の天竜橋（現在の天竜川橋付近）[写真①（徳川慶喜撮影）]と現在の天竜川橋 [写真②]



海の安全を守り続ける

## 掛塚灯台

提供：竜洋郷土資料館



▲▶明治30年の掛塚灯台落成式の様子（中央付近に木造の旧灯台が見える）【写真①】と現在の掛塚灯台【写真②】

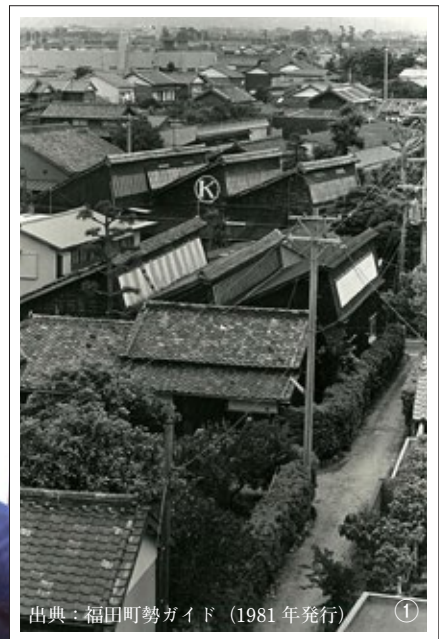


掛塚は江戸時代から明治時代にかけて、天竜川河口付近に掛塚港があり、木材や米などを大阪や江戸へ運ぶための船が行き交っていた。遠州灘沖は、天竜川がたびたび引き起こす洪水によって大量の土砂が押し出され、それによってできた浅瀬に多くの船が乗り上げ遭難する難所でもありました。

明治13年（1880年）、当時駒場村に住んでいた旧幕臣の荒井信敬が、私財を投じて建設した灯台が「掛塚灯台」の始まりです。この灯台は、高さ7メートルの木製の檣に種油を入れて燃やすといった簡易的なものでした。明治30年（1897年）には明治政府により、上半分が鉄製、下半分がコンクリート製で水面からの高さが17メートルの灯台が建設されました。その後、掛塚灯台は平成14年（2002年）まで1世紀余り活躍し、平成14年に現在の場所に移設されました。

## 国内随一の生産地に 別珍・コードロイ

福田地区で盛んな織物業は、江戸時代後期に始まりました。明治2年（1869年）頃に5戸ほどであった織物業者は、明治14年（1881年）頃には42戸にまで増えました。当初は足袋底などを中心に織っていましたが、次第に新しい布を織るような工夫がされ、明治29年（1896年）頃からコードロイの製造が始まりました。当時、下駄の鼻緒の材料として使われていたコードロイは、ほとんどを輸入に頼っていましたが福田地区の人々により国産化が実現されました。



出典：福田町勢ガイド（1981年発行）

▲◀特徴的な三角屋根の工場（昭和30年代）【写真①】と現在の織物の様子【写真②】



明治43年（1910年）頃になると別珍の製造が始まり、大正から昭和にかけて、福田地区は別珍・コードロイの全国有数の産地となりました。現在では数が少なくなりましたが、三角屋根（「ノコギリ屋根」ともいわれる）の工場は、地域を代表する風景となっています。

（参考：いわた文化財たより）